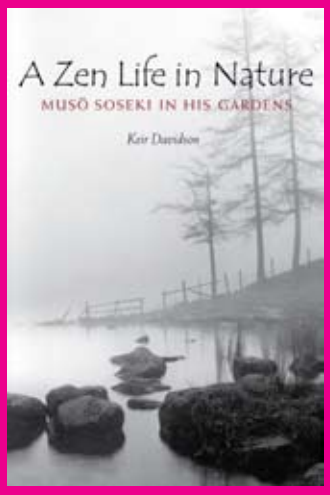
学

ミシガン大学
日本研究センター

2007年秋

日本研究センター出版会新刊書



『*A Zen Life in Nature: Musô Soseki in His Gardens*
（自然の中の禅生活：夢窓疎石の庭園）』
キア・デビッドソン（Keir Davidson）著
（イギリス湖水地方、カンブリア、ブレア湖；写真提供：トニー・ワトソン）

DENSHO
伝書

ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
University of Michigan
1080 S. University, Suite 36-40
Ann Arbor, MI 48109-1106

DENSHO
伝書

ミシガン大学
日本研究センター

2007年秋

所長ご挨拶

日本研究センターは、今年「還暦」すなわち60歳の誕生日を迎えました。多くの皆様がご存知のとおり、伝統的な日本の暦は60年の周期に基づいています。「還」すなわち「還す」と「暦」から形成される『還暦』は、新しい周期の始まりを告げます。（もちろん、この用語は伝統的に男性のみに当てはまることを私は知っています。でもしばしこの隠喩をお許しください。）この新しい周期の始まりに立つ当センターは、皆様がご存知の何年も前のセンターとは大幅に異なるのではないかと考えています。

私はしばしば、教員ならびに元学生が、当センターがレイン・ホールにあったころのことを懐かしげに語る様を耳にします。当センターの教員の多数がレイン・ホールにオフィスを構えていて、日本を研究する大学コミュニティーのメンバーにとってエキサイティングな場所であったとも聞いています。

現職の教員の過半数は、当センターが1997年にレイン・ホールから移動した後にミシガンにやってきました。教員は今や、大学内の様々な学部学科に点在し、日本研究センターと同じ建物にオフィスを構えているのは私一人だけです。私たちのコミュニケーションはEメールのやりとりで行われることが多くなりました。

この変化を嘆かわしいと思う方が多いのは承知しています。もはや昔のようではなくなったことには私も同意します。しかし、私は、当センターの現況は、強さのしるしであり日本学の重要性の高まりを反映していると考えます。その訳は二つです。

第一に、当センターは現在、フルタイム3名、パートタイム2名の優秀な常勤スタッフを抱えています。彼らは、教員、学生、学界、そして一般市民に対してより効率的なサービスの提供を可能にしています。当センターの一番最近の大規模なイベント、ミシガン・シアターでの原一男とマイケル・ムーアの一般公開会談は、献身的なスタッフの私心のない尽力なしには実現しなかったことでしょう。

第二に、当センターの教員は、今や、各自専門の学部に深く融合しています。日本は、もうエキゾチックな研究対象、珍しい研究対象ではありません。私たちは、隔離された存在ではなく、主流なのです。そして日本に関する情報は、より容易に入手できるようになり、より正当に評価されています。少なくとも私の場合、この移行は（これは以前にもこのコラムで書いたとおりですが）当センターの同僚ばかりでなく、学部の同僚にも助けを求めて依存できることを意味します。それは、彼らが私の日本関連の仕事に（たとえみせかけであっても）実際に関心を持っているからです。

もちろん、こうした便益は、ある意味で日々の交流や「フェースタイム（共にすごす時間）」の犠牲のうえに成り立っているのも事実であり、この点はもっと改善しなければならないと思っています。しかし、2007年の日本研究センターは、かつては予想され得なかったような具合に、若々しく活気に満ちています。ボブ・ディランに失敬を承知で述べますが、現在還暦の日本研究センターは、「あのときはずっとふけていて、今はうんと若い」のです。

所長
マーク・D・ウエスト

総編集長より

当センターの最新刊書、キア・デビッドソン（Keir Davidson）著『*A Zen Life in Nature: Musô Soseki in His Gardens*（自然の中の禅生活：夢窓疎石の庭園）』は、中世の禅僧・夢窓疎石（1275年～1351年）の様式と美観を探究しています。疎石は多忙な公の生活から逃避し座禅を行う場として庭園を造営しました。この研究書は、まず疎石の田舎育ちとその精神的な背景、禅僧としての悟りへの求道、そして建武の中興から足利幕府設立にいたるまでの激動期における調停者としての役割などの時代背景を説明することから始まります。他の章は、疎石の美学とデザイン感覚ならびに庭園設計の変遷を理解するうえで必要不可欠な精神的かつ文化的な影響を、丁寧に研究しています。最後に、同書は、疎石が1339年に造園した麗しい西芳寺庭園上段を詳細に観察しています。『*A Zen Life in Nature*』は、中世日本の歴史と宗教を勉強する学生、禅仏教および禅庭に関心のある人、庭園設計全般に興味のある人を含め、幅広い読者層を惹きつけるはずです。『*A Zen Life in Nature*』は、クロス装（ISBN 9781929280377、65.00ドル）と紙装（ISBN 9781929280414、28.00ドル）の両方でお買い求めいただけます。

著者のキア・デビッドソンは、長年の経験のある造園デザイナーであり、これまで庭園設計、造園および禅庭に関し、『*Simple Garden Construction*（シンプルな庭園建設）』（1980年、ダニエル・ロバーツとの共著）、『*ZenGardening*（禅庭）』（1982年、米国では1983年に *The Art of Zen Gardens*（禅庭の芸術）として出版）、『*Garden Planning and Construction*（庭園設計と造園）』（1983年、ダニエル・ロバーツとの共著）の3冊の書籍

第15ページに続く

目次

CJSへの別れの挨拶 2

極私的ドキュメンタリー：原一男＋マイケル・ムーア 3

マーク・マクレランド・トヨタ招聘客員教授 6

センター催し物 6

これまでの催し物 7

教員・アソシエート短信 8

学生・卒業生短信 9

お知らせ 12

カレンダー 14

トヨタ招聘客員教授からの挨拶

CJSへの別れの挨拶

川人貞史、TVP2006～2007年

私は、2006年9月から2007年4月までトヨタ招聘客員教授（TVP）でした。米国長期滞在は、今回が初めてのことではありません。以前には米国の東海岸（マサチューセッツ工科大学）と西海岸（スタンフォード大学）に滞在したことがありました。ですから、3度目の米国滞在はミシガン州アン・アーバーが最適の場所であると考えました。そしてそれは真実でした。

TVPであることは、大きな特権であったといえます。講義を行う義務が比較的軽いため自分の研究に集中することができました。さらに、私が所属する大学での会議や雑務から解放されました。CJSは、友好的で卓越した教員とスタッフのいる快適な仕事の環境を提供してくれました。当地滞在中に新しい研究のアイディアをいくつか見つけ育むことができたのは非常に喜ばしいことでした。さらに、ゆりさん、サンディーさん、ジェーンさん、アンさんとほぼ毎日のように交わした会話は楽しいものでした。また、CJSのディレクターであるマーク・ウエスト氏がミシガン・スタジアムに連れて行ってくれたときにウォルヴァリンズがノースウェスタン大学に圧勝したことも、楽しい思い出となりました。もっとも、10月なのに凍るように寒さの厳しい日で、ハーフタイム後にスタジアムを後にしなければなりませんでしたが。

振り返ってみるに、8ヶ月はあっという間に過ぎました。私は、ミニコースを2クラス教え、多数の専門講義やセミナーに出席し、両海岸に何度か出張し、ミシガン大学内外でプレゼンテーションを数回行い、春休みに訪れてきた私の成長した子供たちとロサンゼルス地域での休暇を満喫しました。

冬は、全世界的に暖冬であったようですが、私は、当地で2月にあったような3週間連続零下という気温を経験したことはこれまで一度もありませんでした。最低気温は華氏マイナス7度と確認しましたが、華氏マイナス20度くらいに感じられました。アン・アーバーでこれほどの寒さにあうとは思ってもいなかったので、これは忘れられない最も印象的なこととなりました。私は、日本ではこのような寒さは冷凍庫に指を突っ込まない限り経験できない、と冗談を飛ばしました。

私は日本に帰国しますが、これは決して私のミシガン大学と日本研究センターの最後の訪問ではありません。近い将来に皆さん全員にまたお目にかかれることを望んでいます。

川人貞史
TVP、2006～2007年
東北大学大学院法学研究科・法学部教授

極私的ドキュメンタリー：原一男＋マイケル・ムーア

数年前、ドキュメンタリー映画製作者である原一男と私は、東京のお気に入りの店でビールで再会を祝いました。それは『華氏911』が日本で封切された後まもないころであり、会話の主題は必然的にマイケル・ムーアに転じました。この映画は私たちに大きな印象を与えました。当然のことながら、ブッシュ政権初期の回顧のようなものとしては、原の経験は私の経験とは極めて異なるものでした。彼の9・11、戦争、選挙、およびこの映画の他の全ての内容との関係は、呆れつつも興味津々の傍観者としてのものであり、その一方で私は、基本的に呆然とさせられ虐待されたと感じました。しかしまもなく、私たちの話はムーアの歴史へのアプローチ、特に過去を彼自身の素晴らしく風変わりな観点を軸に回転させる手法に進みました。原が、ムーアが自分の仕事を尊敬してくれていると噂に聞いたことがあると述べたのは、この前後関係においてのことでした。

上写真：阿部・マーク・ノーネス、原一男の映画を紹介する
左写真：マイケル・ムーア、舞台での会談中

これには合点が行きました。原は、写真撮影からドキュメンタリー映画界に参入し、一連の仰天すべき映画で名声を築きました。彼のデビュー作『さようならCP』は、脳性まひの男性が、性行為や結婚から、健康な人々の態度への対処や、そもそも話すことまで、彼の症状が呈する人生の難関をすべてにわたり、カメラと共用する映画です。この映画には日本語の字幕がないため、観客は彼の言葉に合わせることを強要されました。映画は、男が、最初は混雑した公共の広場で警察に追っ払われるまで、次は裸で通りの真ん中で、詩を朗読するところでクライマックスに達します。原の第2作は、『極私的エロス　恋歌1974』（1974年）という題名です。フェミニストであり、独立した新しい人生を送ることを決意した原の前妻について、原と彼のガールフレンドが製作したドキュメンタリーです。2人の女性は、互いの監督との関係について親密な話（と不平）を分かち合います。それを撮影するカメラを操作しているのはその監督当人です。この映画は、この2人の女性が自宅で自力で出産をするところでクライマックスを迎えます。原は、次に、第二次世界大戦も終盤の悲惨なニューギニア戦に関する隠蔽された歴史について、悪名高い『ゆきゆきて、神軍』（1987年）を撮りました。監督は、退役軍人が自分が所属した師団のメンバー数名が銃殺された状況を掘り起こしてゆく過程を追跡しました。この退役軍人は、型破りの当惑させるようなインタビューを用います。彼の戦争仲間や上官が返答を濁すと、彼は、自分の妻に死刑に処せられた者の親戚であるふりをさせ、罪の意識を持たせようとします。それが功を奏しないとなると、彼は、彼らの口から真実を文字通り叩き出します。その間、原は一切介入せずにカメラを回し続けます。これらは彼の初期の作品の一部にすぎません。（3作品とも最近、DVDがファセットビデオから発売されました。）

このわずかな説明からだけでも、なぜマイケル・ムーアが原一男の作品に惹かれているかは明白なはずです。両人とも、映画製作者の情動的存在に基づくドキュメンタリーへのアプローチの良い見本です。両人とも、何が起こっているかを知るために歴史的な世界に自分自身を挿入し、カメラの前での本人と人々とのやりとりがなければ決して起こらなかったか、隠されたままに留まったような何かが暴露される様子を記録します。この意味において、この2人の映画製作者は、監督の主観に根ざした個人的なドキュメンタリー、すなわち一種の映画エッセイを作り上げたといえます。そして、1970年代は、両監督にとって独自のスタイルを確立してゆく時期でもありました。しかし、これまでの説明は同時に、この2人のアーティストがいかに異なるかも示唆しています。こうした類似性と相違性を実際の対面を通じて引き出すことができれば、どれほど素晴らしいことでしょうか。私がミシガン州にいることで、これは可能かもしれない。やってみよう、と私は原に言いました。

かくしてアン・アーバーに戻った私は、マーク・ウエストおよびジェーン・オザニッチとこの可能性について話し合いました。2人はこのアイディアを非常に気に入りました。そしてマイケル・ムーアに連絡した

次ページに続く

極私的ドキュメンタリー：原一男＋マイケル・ムーア（続）

マイケル・ムーアとマーク・ウエスト、舞台での会談中

ところ、彼は即刻、彼が原一男に会うことを当てにしていてくれてよいとの一報をくれました。

ムーアは、『シッコ』の編集の最中に私たちの招待に応じてくれました。編集は、映画製作過程において計画よりも長引くことが避けられない段階です。彼は最終的に、音響編集の終了とカンヌ映画祭に向かう飛行機搭乗の間に、アン・アーバーへの訪問をねじ込んでくれました。私たち全員は非常に有難く思い、彼もそう思ってくれたように私には感じられました。2人の監督は、ミシガン・シアターの舞台で対面しました。そして会談はまったくもって魅惑的でした。それはムーアが彼が原の映画を発見したところから始まりました。

私は、『ロジャー&ミー』の編集の3分の2ほどを終えていました。ホワイトハウスから4ブロック、ケネディ・センターから5ブロックのところで映画の編集作業をしていたわけです。その夜、ケネディ・センターでは『ゆきゆきて、神軍』と呼ばれる映画を上映することになっていました。これは映画にはすこぶる奇怪なタイトルだと思ったのです。別に裸の軍隊に興味があったわけでも何でもないんですよ。ただもう本当に編集室から脱出したい気分だけだったのです。そこで、歩いて出かけていって、座って、と思ったらその後の2時間は釘付けでした。まず最初に、映画の愛好者としてですが、それはまるで日本に気心のつながった兄弟がいるかのような気分でした。彼は、自分と同じようなことをしていると言えたかどうかは分かりませんが、このドキュメンタリーという芸術形式を、ディスカバリー・チャンネル的やり方とは非常に異なる方法で利用していることは確かでした。あの夜、通りを歩いて戻る鼓舞された自分、元気づけられた自分を、私は覚えています。あのようなものを観たことはそれまで一度もありませんでした。本当に、一度もありませんでした…。つまり、ワシントンにいて、フォックス・チャンネルのニュースのレギュラー出演者にされているのは孤独なことだったわけで、自分を保守派のように感じさせてくれることがあるなら何時でも何でもOKというような気分だったわけです。そういうときに、原は、人々を無感覚にさせない型にはまらない方法でドキュメンタリーを作る方法をしっかり把握していました…。気心の合う人を得たというか、鼓舞してくれる誰かを見つけたというか。しかもずいぶん早い時期に彼のまったく知らないところでそれが起きたのです。この映画を観た後、私は、許可を得たと感じました。私は、『ロジャー&ミー』を自分のやり方で作る許可を自分自身に与えたのです。

ここから、原一男とマイケル・ムーアは、様々な話題を網羅し、映画製作や互いの作品に関する考えを分かち合いました。私たちの予想どおり、相違性と類似性の両方の焦点が徐々に絞り込まれていきました。原は、ノンフィクションの映画に対してきわめて独特な観点を持っています。そしてマイケル・ムーアが彼の単なる政治活動ではなく（政治的）芸術に関して語るのを聞けたことは素晴らしいことでした。次は、特に意味深長な対話部分です。

原：映画製作者なら誰でも、資金に加えて、骨の折れる映画の製作過程全体を通じて自分を持続させていくためのエネルギーが必要です。私は、あなたの様々なインタビューや本を読んで、あなたをしばしば持ち堪えさせるのは、あなたの持つ怒りであると知りました。私は、それよりもっと深いものが必要だと思うのです。私の場合、私を持続させるものは自分自身

原一男と小林佐智子（プロデューサー）、彼の作品『ゆきゆきて、神軍』を紹介

に対して私が感じる疑問符です。未知の部分が私の中にあるのです。それは私を私の知らないどこかに導くもので、私はおそらくそれが怖いのです。しかし、私には、それが何かを見出したいという非常に強い願望があります。そして私がドキュメンタリー映画を作るのは、社会正義のためではなく、大衆を組織するためでもなく、何らかのテーマを説明するためでもなく、その他の何のためでもなく、ただ自分の中にある疑問符を発見するためだけなのです。したがって私は、被写体をカメラで撮影していますが、それと同時に自分の内部に向けたカメラを抱えているわけで、それで内面をどんどん掘り下げていくのです。あなたにもそのようなことがありますか?

ムーア: 怒りについては、ちょっと違うんです。私は、自分の怒りが実際に自分を混乱させることを心配しています。個人的にです。怒りが私を持続させるとおっしゃいましたが、本当のところ、人々は本当は善良であるとの楽観的な希望に満ちた私の信念が私を持続させているんだと思います。そして、暗い時期にこそユーモアのセンスを維持することが、非常に重要なことです。

世の中にある怒りや絶望から自分の魂が崩壊するのを防ぐためには…。映画製作者として、私は、まず第一に、自分自身を芸術的に表現すべく、こうした映画の製作に取り組みます。そして私は常に芸術を政治よりも重視します。政治に重点をおくと、少なくとも映画においては、誰も観たがらないようなお粗末な映画になってしまうからです。

この短い対話が示唆するように、ミシガン・シアターの観客は、世界最高のドキュメンタリー映画製作者2名が互いに模索しあう様子を目の当たりにしました。そのプロセスの一部は、それぞれが相手について抱いていた考えと自分自身について持つ考えと比較することでした。共にカメラの前の現実に干渉する傾向をもち、1960年代および1970年代の混沌の中で青春を過ごした二人は、気心の知れた仲間意識を感じています。しかし、この時代の共通性は、日本と米国の状況が幾つか基本的な点で異なったため、むしろ分岐点である可能性が高いといえます。

原一男、ミシガン・シアターにて彼の作品を説明する

ムーアは、基本的に時代の政治的精神を採り上げ、ユーモアと皮肉を効果的に利用し、一人称によって映画的な過程を練り上げて前進していきました。それとは対照的に、原は、学生運動の暴力化が衝撃を与え、絶望や挫折につながった時期に、映画を製作し始めました。このことは、彼が、政治的意味を持つ映画を作りながらも自分自身を社会運動に結びつけることを好まない理由となります。

この相違点は、観客の一人がドキュメンタリーおける肉体のリプリゼンテーションについて質問した際に、明白となりました。これは、原の脳性まひ、セックス、戦争に関する革新的な映画作品、そしてムーアの医療危機に関する新作を考慮すると、興味深い質問です。ムーアは、冗談の前置きから始めました。

「『シッコ』は私の映画では初のヌード入りです。格付けは、格付け機関からもらったばかりですが、初のPG-13です。しかも男性ヌードです!」

しかし彼はその後、質問への返答に苦労しました。彼は、最近の歴史、政治、日常生活の苦労をクリエイティブに演出することの困難さを説明することの方が心地よいように見受けられました。他方、原は、彼のムーアとの関係について考えるためにその質問を利用し、次のように述べました。

「これは、私が考えるに、マイケルの作品と私の作品の重要な相違点に触れる話です。私がドキュメンタリー映画でしようとしていることは、観客のそれぞれの感情に働きかけ、それを活性化することです。マイケルは、これを彼の言葉を通じて行い、私は、肉体を用いてそれを行うんだと思います。私は、観客が私の映画を観終わったとき、自分の体で何かを行いたいと切望する状態に残したいと思います。私は彼らの肉体をそういう具合にさらってしまいたいのです。」

それは、その夜の最終部、すなわち両監督が舞台を去り、観客の肉体が『ゆきゆきて、神軍』の上映中にさらわれた時に起こりました。会談は始まったばかりであるかのように感じたのは私一人ではありませんでした。

阿部・マーク・ノーネス
ミシガン大学スクリーンアート文化学部・
アジア言語文化学部教授

写真クレジット:マーティン・ヴロート、
ミシガン大学フォト・サービス

セ　ン　タ　ー　催　し　物

2007〜2008年トヨタ招聘教授

CJSは、第32回トヨタ招聘教授である**マーク・マクレランド**教授を9月12日のレセプションで歓迎しました。マクレランド教授は、日本社会学・文化史の第一人者であり、性の歴史、ジェンダー論、ニューメディアを専門としています。同氏の最近の出版物は、戦後日本の性的少数派文化の歴史、および日本におけるインターネットの発展、特に日本国内およびアジア全域における少数派コミュニティによるインターネットおよびその他のニューメディアの利用に焦点を当てています。これら出版物には、『*Male Homosexuality in modern Japan*（現代日本における男性同性愛）』（2000年）、『*Queer Japan from the Pacific War to the Internet Age*（太平洋戦争からインターネット時代までのクィーア・ジャパン）』（2005年）、および編集コレクションとして『*Japanese Cybercultures*（ジャパニーズ・サイバーカルチャーズ）』（2003年）、『*Queer Voices from Japan*（日本からのクィーア当事者の声）』（2007年）が挙げられます。同氏は、2005年にバンコクにて「Genders, Sexualities & Rights: 1st International Conference of Asian Queer Studies（ジェンダー、セクシュアリティと人権：アジアン・クィーア・スタディーズ第一回国際会議）」を開催した研究会であるAsiaPacificQueer（http://apq.anu.sdu.au/）の創立メンバーであり、また、2008年にイリノイ大学出版会から出版される『*AsiaPacificQueer: Rethinking Gender and Sexuality in the Asia-Pacific*（AsiaPacificQueer：アジア・パシフィックのジェンダーと性再考）』の共同編集者でもあります。ミシガン滞在中は、新しい執筆プロジェクトである『Sex in the City: Reconstructing Gender and Sexuality in Tokyo, 1945-1955（都市の性：東京におけるジェンダーと性、1945−1955）』に携わり、戦後日本におけるジェンダーとセクシュアリティの変遷に関するコースを講義する予定です。

マーク・マクレランド、TVP2007〜2008年

2007〜2008年ヌーン・レクチャー・シリーズ

「Trocoids Positive」2003年、ゼラチン・シルバー・プリント（フォトグラム））杉浦邦恵作

CJSの2007〜2008年ヌーン・レクチャー・シリーズは、9月13日に芸術家である**杉浦邦恵**の公演によって始まりました。今年のシリーズは、CJSのメンバーおよびアソシエーツの5名、すなわち**ジョナサン・ズウィッカー**（アジア言語文化、10月8日）、**ジェニファー・ロバートソン**（人類学、11月1日）、**福岡真紀**（アジア言語文化、11月15日）、**竹中晶子**（美術史、1月24日）、**北山忍**（心理学、2月14日）による講義を披露します。秋季の講演者のリストについては、第14ページのカレンダーをご覧ください。または、http://www.ii.umich.edu/cjs/events/calendar.htmlを訪問してください。

2007年のお餅つきでの折り紙テーブル

2008年お餅つき

CJSの第4回年次お餅つきは、2008年1月5日午後1時〜4時に社会福祉学部ビル（School of Social Work Building）で開催される予定です。活動には、お餅つきと試食、折り紙、ゲーム、書初め（新年の書道）、紙芝居、ライブ音楽演奏が含まれます。イベントは無料一般公開されます。

ミシガン・ジャパン・クイズ・ボウル

2008年度ミシガン・ジャパン・クイズ・ボウルは、3月15日に開催される今回で15年目を迎えます。ミシガン日本語教師協会（JTAM）により開始されたこの年一度のクイズ競技イベントは、当初は小中高等学校で　実施されていました。その後、参加者の増大により、イベントは2001年にミシガン州立大学に移され、さらに2005年にはミシガン大学／CJSに移されました。このイベントの詳細情報につきましては、ジェーン・オザニッチ（jozanich@umich.edu）にご連絡ください。

2007年ミシガン・ジャパン・クイズ・ボウルのトロフィーとメダル

これまでの催し物

ベアテ・シロタ・ゴードン、超満員の観衆を前に話す

自らも認める人間文化遺産である**ベアテ・シロタ・ゴードン**が、3月15日にCJSの2007年冬季ヌーン・レクチャー・シリーズで満員御礼の観衆を前に話をしてくれました。彼女の「Drafting the Women's Rights Clause for the New Japanese Constitution（日本国憲法：女性の権利の条項を起草して）」と題された活気にあふれた面白い話は、両親とともに日本で暮らした少女時代から現在までの彼女の人生行路のハイライトでした。CJSは、在デトロイト日本国総領事館からこの講演に寛大なご支援をいただきましたことにお礼を申し上げます。

2007年ミシガン・ジャパン・クイズ・ボウル

CJSは、3月24日、近代言語ビル（Modern Language Building）において、ミシガン日本語教師協会（JTAM）による第14回年次**ミシガン・ジャパン・クイズ・ボウル**（MJQB）を指揮、開催しました。ミシガン州のK-12（幼稚園から高等学校まで）の22校から最高記録の335名が出場し、5つの部門で競い合いました。今年のイベントでは、ミシガン州南東部の「雅」による琴と尺八の演奏、および在デトロイト

MJQBには文化的展示、ポスター、Tシャツなどのコンテストも含まれる。写真のディスプレイは1位を受賞。

［写真：］ケンジロウ・ササキ、ボランティアとして来客に折り紙の折り方を教える

日本国総領事の**篠塚保氏**による授賞式が行われました。CJSは、来る3月15日に、2008年度のミシガン日本クイズボウルを指揮、開催します。

第4回年次アン・アーバー・ブックフェスティバル

CSJは、アン・アーバー・ブックフェスティバルの設立以来、このイベントにおけるインターナショナル・パビリオンでのインターナショナル・インスティテュート各部門の参加をコーディネート　してきました。今年のパビリオンは、音楽、ダンス、物語、工芸、そしてもちろん、CSJが代表するミシガン大学インターナショナル・インスティテュート各地域センターと関係する世界各地の書籍を呼び物としました。アン・アーバー・ブックフェスティバルの詳細につきましては、http://aabookfestival.org/を訪問してください。

CJS、インターナショナル・インスティテュートのスタッフとともに七夕祭りを祝う

ミシガン大学インターナショナル・インスティテュート（II）のセンター関連活動の一環として、CJSのスタッフは、IIのスタッフのために七夕祭りのミニレッスンを企画、実施しました。参加者は、素麺を食し、麦茶を飲み、折り紙を折り、願い事の短冊を特別な「笹」に飾りました。

Out of the Ordinary（非日常）：最近の日本映画の新しいアイデンティティ

ミシガン大学美術館（UMMA）での特別展「Out of the Ordinary/Extraordinary: Japanese Contemporary Photography（日常／非日常：現代日本の写真）」（2007年6月16日～9月16日、http://www.umma.umich.edu/）がつけた先鞭に追随し、CJSでは、2007年夏季映画シリーズを、尋常でない登場人物と筋書きを採り上げた映画を中心にまとめました。『下妻物語』（中島哲也監督）、『誰も知らない』（是枝裕和監督）、『紀子の食卓』（園子温監督）、『月はどっちに出ている』（崔洋一監督）の4作品が、すべて8月に上映されました。

上写真：下妻物語（写真提供：ヴィズ・ピクチャーズ）
下写真：紀子の食卓（写真提供：タイドポイント・ピクチャーズ）

教員・アソシエート短信

江森　祥子（アジア言語文化学）は最近、3つのプレゼンテーションを行いました。まず2007年3月には全米日本語教師協会の2007年度セミナーにおいて（ミシガン大学ALC講師である奥寺フミエと共同で）、「Online Project for Novice and Intermediate Levels: Developing Students' Spontaneous Discourse through Listening Practice（初級・中級レベルにおける参加型聴解練習の提案）」のプレゼンテーションを、5月にはプリンストン教授法フォーラムにおいて、石川智（アイオワ大学講師）と共同で「Introducing an Intermediate to Advance Level Japanese Textbook Based on the National Standards: How to Integrate the 5C's and 3P's in Our Teaching（National Standardsに基づいた日本語中上級教科書の開発～5Cと3Pを取り入れた教科書の実践報告）」のプレゼンテーションを、最後に8月にはコロンビア大学で開催された日本語教育国際研究大会において、「目的をあらわす「ために」文の動性について―「ように」文の状態性との比較」のプレゼンテーションを、それぞれ行いました。

アイリーン・ガッテン（CJS非常勤研究員）は、ジョーン・ピゴット、イーボー・スミッツ、イネケ・ヴァンプット、ミシェル・ヴィエヤール＝バロン、およびシャーロッテ・フォンヴェルシュエールにより編集された『*Dictionary of Sources of Classical Japan*（欧文日本古代史料解題辞典）』（コレージュ・ド・フランス、2006年）に寄与しました。ヨーロッパ、米国、日本の学者の共同作業の成果であるこの辞典は、学生、学者、およびその他関心を持つ読者を日本の奈良時代および平安時代（710～1192年）に遡る、または関係する資料関する指導書となることを意図しています。この辞典は、各資料の内容および特徴を説明し、刷版および入手可能な翻訳版に関する著作目録情報を提供する1,200項目余りを収録しています。

ウィリアム・P・マルム（音楽学・民俗音楽学名誉教授）は、2007年6月23日にジュッタ・ガーバーと結婚しました。マルム名誉教授の著作、『*An anthology of Japanese Nagauta Song Texts*（長唄歌詞選集）』は、2008年初期に入手可能となります。

ゲイル・ネス（社会学名誉教授）は、2007年夏に神戸で行われた2つのワークショップの一端を担いました。ワークショップは、神戸アジア都市情報センター（AUICK）の一環であり、同センターの設立以来、ネス名誉教授が協力しているものです。AUICKでは、アジアの都市問題に関する研究を行い、総合都市計画のかたちで都市行政に携わる人たちに訓練を提供しています（www.auick.org）。ネス名誉教授は、ワークショップに加え、京都の総合地球環境学研究所（RIHN）を訪問しました。さらに現在、東京、バンコク、ソウル、台北、マニラを含む幾つかのアジアの主要都市における地盤沈下に関する論文集の客員編集員としても仕事をしています。また、日本大学人口問題研究所と「Aging in Asia（アジアにおける高齢化）」プロジェクトに関して協力しています。

阿部・マーカス・ノーネス（アジア言語文化；スクリーンアート文化）は、フランクフルトのニッポン・コネクション映画祭に合わせてキネマ倶楽部会議を協同組織しました。小川プロダクションに関する同氏の書籍、『*Forest of Pressure*（プレッシャーの森）』は、今年春に出版されました。1991年に死床にあった小川紳介監督に対する約束であるこの出版物は、5月の大イベント「極私的ドキュメンタリー」（第3ページの記事をご参照ください）に関連したシャーマンドラム書店のレセプションでの祝賀を受けました。

岡 まゆみ（アジア言語文化）は、全米日本語教師協会運営委員会（AJT）の任期3年のメンバーに選出されました。さらに、3月にはアイオワ大学での中西部日本語教師会第19回大会において、論文のプレゼンテーションを（ミシガン大学アジア言語文化学の江森祥子、花井善郎、近藤純子と共同で）行いました。「The Development of a Post-Intermediate Japanese Textbook for English Natives Based on the National Standards（National Standardsに基づいた英語母国語者のための上級日本語教科書の開発）」と題されたこの論文は、ミシガン大学の日本語プログラム用の教科書開発プロジェクトを説明したもので、2009年春にくろしお出版からに出版される予定です。

ジェニファー・ロバートソン（人類学）は、東アジア人類学協会（アメリカ人類学会、AAA）の任期2009～2011年の会長に選出されました。ロバートソン教授はさらに、人間型ロボット、サイボーグ優生学、親族関係、および未来の日本家族に関する研究のために全米人文学基金の日本の社会科学先端研究フェローシップ（2007年1～5月）を受けています。その後4月から8月までは、イスラエルのテル・アビブ大学の客員教授兼フルブライト研究者でした。ロバートソン教授は、2007年1月以来6回の講演を行っています。もっとも顕著な講演は、6月7日にテル・アビブ大学社会学・人類学部の2007年度ホロウィッツ・コア・レクチャーで行われた「Robo sapience japanicus: Humanoid Robots and the Posthuman Family（ロボ・サピエンス・ジャパニカス：人間型ロボットとポストヒューマン家庭）」でした。講演に加え、2007年には現在までに論文2編が再版され、他に数編が出版されています。近刊予定としては、「*Blood in All of Its Senses – as a Cultural Resource*（文化資源として全感覚に内在する血）」（山田晋司とジェリー・イーズの編集による『*Cultural Resources*（文化資源）』に掲載、オックスフォード大学バーガン・プレス）、「Relentless Presentism: Postgender as Prehistry in Contemporary Japanese Art（たゆみなき現在性：日本現代芸術における先史としてのポストジェンダー）」（アヤレット・ゾハー編集による『*PostGender: Gender, Sexuality and Performativitiy in Japanese Culture*（ポストジェンダー：日本文化におけるジェンダー、セクシュアルティ、およびパフォーマティビティ）』に掲載、ケンブリッジ大学ケンブリッジ・スカラーズ・プレス）の論文2編が控えています。

学生・卒業生短信

CJS卒業生・学生の最新情報

2008年8月に卒業したCJS関連博士課程学生は、**有賀　理**（経済学）と**ピーター・アレクサンダー・ベイツ**（ALC）の2名です。また、2006年12月には、**アン・クラップケービッチ**（CJS修士課程）、**ジョシュア・アイゼンマン**（CJS修士課）、**アンエリス・ルアレン**（人類学博士課程）、**リエン・ヨン**（CJS修士課程）が卒業し、2007年4月には、**マイケル・アーノルド**（CJS修士課程）、**ヘザー・リトルフィールド**（CJS修士課程）、**ホイト・ジョシュア・ロング**（ALC博士課程）の3名が卒業しました。

トム・ブラックウッド（CJS修士号1998年卒、社会学博士号2005年卒）は、大分県別府市の立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部の助教授に就任しました。（2007年4月）

趙 秀美（チョ・スミ、人類学博士課程）は、ウェナー・グレン財団から論文研究助成金、全米科学財団から博士論文改善助成金、CJSから「Multiculturism, Okinawan Popular Culture and the Politics of Ethnicity in Osaka（多文化主義、沖縄大衆文化、および大阪の民族政治）」論文研究プロジェクトのためのメロン財団奨学金をそれぞれ受けました。9月には、沖縄大衆文化とメディア文化の慣行が「大阪の沖縄タウン」である大正区において離散した沖縄人と少数民族系日本人が交流する様に影響するかに関する1年間の民族学的研究に着手しました。

董　戈（ドン・グ、CJS修士号2002年卒）は、2006年8月にコネティカット州に引越し、保険会社に勤務しています。

今田　俊恵（心理学博士課程）は、2007～2008年学年度ラッカム博士候補生奨学金を受けました。

ヘザー・リトルフィールド（CJS修士号2007年卒）は、彼女と彼女のチームのコソボでの功績により、米国防省から女性模範賞を受賞しました。（2007年3月）

グレン・ヘットカー（国際ビジネス学博士号2001年卒）は、最近、イリノイ大学アーバナ・シャンペイン校経営学部の准教授に昇進しました。また、同大学の高等研究センターのレジデント・アソシエートに任命され、同センターの太平洋の世紀における科学技術関連イニシアチブを主導しています。さらに、同大学の起業リーダーシップアカデミーの教員フェローにも任命されました。ヘットカー教授は、法学部およびゲノム生物学研究所にも任命されました。

スティーヴン・S・ラージ（CJS修士号1965年卒、歴史学博士号1970年卒）は、2006年9月にケンブリッジ大学近代日本史学のリーダーの職を引退しました。ラージ教授は、アイオワ大学（1969～1973年）および南オーストラリア州のアデレード大学（1974～1987年）での在任を終えた後、1988年以来ケンブリッジ大学で教鞭をとっていました。ラージ教授のケンブリッジでの連絡先は、stephen.large4@btkwirkd.comです。

ブルック・レースラム（CJS修士課程）および**モーリー・デジャルダン**（ALC博士課程）は、横浜のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターに留学しています。

ヘザー・リトルフィールド、
CJS修士号、2007年卒

ウィリアム・ロンド（歴史学博士号2004年卒）は、ミシガン州立大学アジア研究センターのアソシエート・ディレクターの役職に就任しました。

ホイト・ロング（ALC博士号2007年）は、2006年12月に博士論文（「On Uneven Ground: Provincializing Cultural Production in Interwar Japan」）の口頭試問に合格し、2007年4月に博士号を取得しました。彼の研究は作家の宮沢賢治および近代の地方／地域文化アイデンティティの創生を専門とし、彼は、この研究を9月から教鞭をとり始めたニューヨークのバード大学の助教授として継続していく予定です。

尾野 嘉邦（政治学博士課程）は、最近、アン・グルジマラ-ブッセ教授（社会科学総合研究所）とともにロイ・ピアース賞（夏季奨学金）を、そして2007～2008年学年度ラッカム博士候補生奨学金の、2つの奨学金を受けました。

スマ・パンディ（CJS修士課程）は、建築学博士課程プログラムに合格しました。

齋藤　弘久（社会学博士課程）は、2007～2008年学年度メロン／アメリカ学会協議会博士論文完成奨学金を受けました。

デボラ・ソロモン（歴史学博士課程）は、2007年度ラッカム国際研究奨学金を受賞しました。この賞は、北米外で学位関連研究を実施するミシガン大学博士課程の学生に授与されます。彼女の研究は、1929～1930年の日本人学生に対する光州学生運動の歴史的研究と参加者インタビューに焦点を当てるものです。

楊 玉彬（CJS修士号2005年卒）は、最近、双日株式会社デトロイト支社に就職しました。

嚴　昭貞（オム・ソジョン、歴史学博士課程）は、2007～2008年度バーバー奨学金を受けました。

ミシガン大学
日本研究センター

2007年秋

2007〜2008年度教員研究補助金発表

日本研究センターの2007〜2008年度教員向け研究補助金の受賞者が決定しました。この補助金プログラムは、日本の様々な側面を調査する個人あるいは団体のプロジェクトに対して授与されます。本エンドの受賞者およびプロジェクト内容は以下のとおりです。

エドワード・チャン（心理学部准教授）には、「Self-Enhancement and Self Criticism in Japan and US: Exploring Mechanisms and Effects of Cognitive Bias（日本と米国における自己高揚と自己批判：認知バイアスのメカニズムと効果の探索）」に研究資金が授与されました。同准教授とそのチームは、過去のプロジェクトにおいて、ポジティブなイベントとネガティブなイベントに関する認知バイアスを研究するための枠組みを開発し、日本と欧米の研究における文化的相違点を見出しました。その後2つの継続研究により、欧米人は楽観的バイアスにより引かれる傾向があり、他方、日本人はネガティブなイベントの悲観的バイアスにより引かれる傾向があることが明確に立証されました。補助金は、日本人と欧米人の間の認知バイアスにおける過去の文化的相違の原因となった可能性のある特定メカニズムの明確化を追求し、日本人と欧米人の観点から文化的に異なる他者における認知バイアスを認識することによる潜在的結果を探索する一連の研究を援助します。

福岡 真紀（アジア言語文化学部助教授）には、「Between Seeing and Knowing: Shifting Standards of Accuracy and the concept of Shashin in Japan, 1830-1872（見ることと知ることの間：日本における正確さの基準と写真の認識の移行、1820〜1872年）」に研究資金が授与されました。このプロジェクトは、19世紀日本の尾張藩において博物学を追求した民間学者グループである嘗百社に焦点を当てながら、「正確さ」の基準の交渉過程ならびに博物学の形成における視覚的表現の役割を探求します。補助金は、嘗百社メンバーにより作成された3部ある『真影本草』の類似性と相違性を調査するための同助教授の研究出張費の援助となります。

ケン・イトウ（アジア言語文学部准教授）には、スタンフォード大学出版会による出版が承認された同准教授の著書、『Fictive Families in the Meiji Melodramatic Novel（明治のメロドラマ小説における架空の家族）』の校正および索引作成のための補助金が授与されました。同書は、メロドラマの概念を用いた19世紀末の非常に人気の高かった連載小説を調査し、国家が「家」を日本人全員にとって家族の「伝統的」かつ必要不可欠な形体であると押し付けた歴史的時期においてこの小説が日本の家族の代替イメージをいかに提示したかを探索します。

神保 真人（家庭医学部助教授）には、「Perception of Japanese Men and Women on Cancer Screening: Development of Self-Administered Survey（癌検診に対する日本人男女の認識：自記式調査の開発）」に補助金が授与されました。神保博士とそのチームの前回の調査は、個人面接により海外在住日本人男女の癌検診に関する経験、知識、態度、考え、および価値観を探索しました。今回、この補助金は、上述の調査からの結果を組み入れた日本人成人サンプルを対象とする定量的自記式調査の開発、実施準備、および配布を援助します。

北山 忍（心理学部教授）には、「The Voluntary Settlement Hypothesis: An Exploration in Hokkaido（任意植民の仮定：北海道の開拓）」への資金が授与されました。同教授とそのチームは、前回の調査では、北海道にはある形体の個人主義が存在すると提示しました。このことは、内地の文化が高度に相互依存的で集団的であった中で開拓地への任意的な植民が独立精神を培った、との仮定に独特の裏づけを提供します。この補助金は、(1) 米国の個人主義の心理的基礎とみなされている独立性の3側面に関するテストにおいて、北海道住民が内地の住民よりも高得点を取るか否かの調査、(2) 個人主義のアイディアが社会的関係に関して北海道と米国の間で異なるか否かの研究、(3) 北海道、内地、および米国の独立性と相互依存性に関する個人の実例の詳細研究に役立てられます。

ジェームズ・ロブソン（アジア言語文化学部助教授）には、「Inside Asian Images: What the Contents of Statues Can Tell Us about Religious Practices（アジアの偶像内部：立像に内蔵された物が語る宗教的慣行）」への補助金が授与されました。同助教授は、湖南省の小型の木造の宗教的彫像（清朝（1644〜1912年）から現在まで）に関する調査を実施しています。この補助金は、日本の学者と協力し、日本でのみ利用可能な所蔵品や古文書史料を研究し、日本の中国移民を対象としたフィールドワークを実施することにより、湖南省の彫像が日本に移動した範囲・程度を評価するための同助教授の日本への研究出張費の援助となります。

斉藤　万裕（機械工学部助教授）には、「Study of the State-of-the-Art of Eco-Friendly Product Design and Recycling Technologies in Japan（日本における最新式のエコフレンドリーな製品設計およびリサイクル技術の研究）」のための補助金が授与されました。このプロジェクトは、最近の資源有効利用促進法の導入ならびに自動車に関するリサイクル法の導入予定により日本国内のリサイクリング構造基盤が劇的に進化した中での日本の製造業における最新式のエコフレンドリーな製品設計と再生再利用技術を調査します。補助金は、日本の自動車、家電、パソコン、携帯電話等の工場の製品開発部門を訪問し、専門家にインタビューするための同助教授の日本への研究出張費の援助となります。

学

教員・学生へのサポート

ジョナサン・ズウィッカー（アジア言語文化学部助教授）には、研究書『Stage and Spectacle in an Age of Print: Drama and Cultural Consumption in Nineteenth-Century Edo（出版時代における舞台とスペクタクル：19世紀江戸における演劇と文化的消費）』執筆のための補助金が授与されました。同書は、出版の歴史の観点から19世紀日本の劇場文化を研究し、同助教授が最近の著作『Practices of the Sentimental Imagination: Melodrama, the Novel, and the Social Imaginary in Nineteenth-Century Japan（センチメンタルな想像の慣行：19世紀日本のメロドラマ、小説、社会的想像物）』で示した日本の出版文化への関心を更に展開するものです。この助成金は、同助教授の日本への研究出張費に役立てられます。

2007～2008年度CJS学生奨学金

夏季奨学金

エリカ・アルパート（人類学博士課程）
趙 秀美（チョ・スミ、人類学博士課程）
ダニエル・コーコラン（人類学博士課程）
ブライアン・ダウドル（アジア言語文化学博士課程）
シェリー・ファンチェス（歴史学博士課程）
鎌田 伊佐夫（経済学博士課程）
アンドレア・ランディス（アジア言語文化学博士課程）
ケリー・ローウィル（歴史学博士課程）
デボラ・ソロモン（歴史学博士課程）
照山 絢子（人類学博士課程）
嚴 昭貞（オム・ソジョン、歴史学博士課程）

2007～2008年学年度奨学金

インターナショナル・インスティテュート外国語奨学金

ガブリエル・コッフ（人類学博士課程）
ブルック・レースラム（CJS修士課程）
デボラ・ソロモン（歴史学博士課程）

ミシガン大学同窓会日本支部奨学金

有賀 賢一（政治学博士課程）
鈴木 真理（CJS修士課程）

ブリーフィング奨学金

鎌田 伊佐夫（経済学博士課程）
アーロン・ネルソン（CJS修士課程 - 経営学修士課程）

CJS基金奨学金

リンジー・アカシ（CJS修士課程）
有賀 賢一（政治学博士課程）
モーリー・デジャルダン（アジア言語文化学博士課程）
鎌田 伊佐夫（経済学博士課程）
クリストファー・シャド（CJS修士課程）
リア・ゾラー（CJS修士課程）

メロン奨学金

趙 秀美（チョ・スミ、人類学博士課程）

外部奨学金

趙 秀美（チョ・スミ、人類学博士課程；ウェナー・グレン財団論文研究助成金、全米科学財団博士論文改善助成金）
モーリー・デジャルダン（アジア言語文化学博士課程；カレッジ・ウイメンズ・アソシエーション・オブ・ジャパン奨学金）
今田 俊恵（心理学博士課程；ラッカム博士候補生奨学金）
ジェイソン・イリザリー（人類学博士課程；フルブライト奨学金）
尾野 善邦（経済学博士課程；ラッカム博士候補生奨学金）
嚴 昭貞（オム・ソジョン、歴史学博士課程；バーバー奨学金）

お知らせ

ジャパン・キット

ジャパン・キット

K-12（幼稚園から高等学校まで）教育者へのアウトリーチ活動の一環として、CJSは、事物およびその他の指導資料をまとめた一連のキットを開発しました。キットは、短期間の貸出が可能です。2006年夏季に、それまで使われていたジャパン・キットがまとめ直された結果、その後1年間で利用が増加しました。そこで、学校および地域教育者によるより頻繁な借出を目指して、3つの特大箱に収められた書籍、映像、音楽、および資料が再編成されました。この再編成により、各品目コレクションは、一つまたは二つの履修テーマにより分類されました。多忙な教師は、時間をかけて箱の中身を掘り出し発想を得る代わりに、課題を探索するための資料の利用方法を容易に把握することができるようになります。CJS卒業生による寛大な寄付のおかげで、ビデオ資料がジャパン・キットに追加されました。ジャパン・キットの最新版は、手短に言えば、日本語の授業を提供する地元の学校、ならびに世界の歴史と地理の授業を提供する学校の関心を集めるはずです。ジャパン・キットの詳細情報につきましては、umcjs@umich.eduまでEメールでご連絡ください。

アジア図書館旅費補助金

2007年7月1日から2008年6月30日までの間にミシガン大学アジア図書館所蔵資料の活用を希望する日本研究者を対象に、旅費、宿泊費、食費、コピー料金を軽減する目的の補助金として、最高700ドルが提供されます。図書館に関する詳細情報につきましては、http://www.lib.umich.edu/asiaをご覧ください。または図書館アシスタントに(734) 764-0406 までご連絡ください。

関心ある研究者の方は、申請書、研究内容および所蔵資料の利用の必要性に関する簡略説明書（250語以内）、アクセスを希望する資料のリスト（申請前に先立ち図書館のオンライン目録で該当資料が利用可能とされていることを確認してください）、最新の履歴書、予算、旅程案を、当センター宛に提出してください。当センターでは、Eメール（umcjs@umich.edu）あるいは以下の住所宛の郵便での申請を、2008年5月31日まで受け付けています。

Asia Library Travel Grants
Center for Japanese Studies
Suite 3640, 1080 S. University
The University of Michigan
Ann Arbor, MI 48109-1106

ミシガン大学の学生、3年連続で日本語スピーチコンテスト上位入選

3月31日、在デトロイト日本国総領事館、デトロイト日本商工会、デトロイト・ウィンザー日米協会の主催による日本語スピーチコンテストで、ミシガン大学の学生が、3年連続で上位入選を果たしました。**アラン・**

第3位受賞のジェニファー・ユーセビオと第一位受賞のアラン・バニー

2007年度日本語スピーチコンテストの後のミシガン大学の日本語講師と学生

バニーが「What is the True Measurement of Intelligence（知能の真の測定値とは何か）」と題したスピーチで第1位を、**ジェニファー・ユーセビオ**が「Working towards Mutual Understanding（相互理解に向けての努力）」と題したスピーチで第3位を、それぞれ受賞しました。

日本語プログラム、第一回学習旅行で名古屋に

ミシガン大学アジア言語文化学部日本語上級課程から、CJSが一部資金助成した学習旅行に参加する学生が9名選出されました。「海外留学カリキュラム融合」（ISAC）名古屋学習旅行は、2007年5月6日から同13日まで実施されました。

アジア言語文化学部の講師である**近藤純子**により組織されたこの学習旅行は、学生に、日本のビジネス文化を学び、日本語を練習する機会を与えました。1週間の滞在中、学生は、名古屋に所在する企業、ビジネス関連博物館、および文化施設を訪問しました。訪問先には、トヨタ、三菱電器、読売新聞、松坂屋、大須商店街、産業技術記念館、ロボット博物館、愛知県陶磁資料館が含まれました。各訪問先では、学生は、ガイドによるツアーとミニ講習に参加し、訪問先従業員との質疑応答に参加しました。この旅行で学生が得た文化的洞察は、日本語を話す人々と日本のビジネス慣行の理解を広げました。

名古屋訪問中のミシガン大学の日本語学生

日本語学生、ロボット博物館で

元CJS客員教授からの投稿記事

1985年夏季、私は、全米人文学基金の日本舞台音楽セミナーのために選抜された大学教授12名のうちの1人でした。ディレクターは**ウィリアム・マルム**でした。私たちのセミナーの会議の大半は、マルム教授が建物の2階分を日本の楽器と研究資料で満たしたバートン記念タワーで行われましたが、グループは日本研究センターにも数回足を伸ばしました。当時、CJSのイベントと活動のプログラムは印象的なものでした。そして現在ではさらに印象的です。その夏の私のアジア図書館での研究、そしてフルブライト助成金1989~1990年による東京藝術大学での1年の成果は、作曲家、武満徹の楽譜、録音、映画音楽の研究である『Toru Takemitsu: A Bio-Bibliography in Music（武満徹：伝記・音楽著作目録）』（グリーンウッド・プレス、2001年）となりました。

チェスターブルック合同メソジスト教会牧師
ジェイムズ・シドンズ博士
www.JamesSiddons.com

元CJS客員研究者からの投稿記事

CJSでは、卒業生および元客員研究者によるCJSまたはミシガン大学での経験を記した短い記事を募集しています。エピソードをumcjs@umich.eduまでご投稿ください。

9月

10日 ワークショップ：「Language of Clothes: Status, Gender, and Law in the History of Japanee Attire from Ancient through modern Times（衣装の言語：古代から近代までの日本装飾史における地位、ジェンダー、および法）」深井晃子（静岡文化芸術大学日本美術史学）、森まゆみ（東京国際大学日本文学社会史学）、武田佐知子（大阪外語大学日本史学）、脇田晴子（城西国際大学日本史学）、脇田修（大阪歴史博物館）の各人による論文プレゼンテーション。午後5～10時、ミシガン・リーグ、ミシガン・ルーム。

13日 ヌーン・レクチャー*：「Shadow & Ephemera（影と短命）」杉浦邦恵（芸術家）。

20日 ヌーン・レクチャー*：「Tokyo after the War: A Young Officer and an Old Philosopher（戦後のの東京：若年の士官と老年の哲学者）」アルバート・スタンカード博士（ペンシルベニア大学精神医学部教授）。

27日 ヌーン・レクチャー*：「Periodic Struggles: Labor, Science, and Menstruation Leave in Modern Japan（周期的なる議論：近現代日本における労働、科学と生理日休暇）」中山いづみ（ファーマン大学歴史学部助教授）。

28日 CJS無料映画上映**：『スウィングガールズ』矢口史靖監督（2004年）。

10月

4日 ヌーン・レクチャー*：山岸俊男（北海道大学行動科学科）（ミシガン大学グループダイナミクス研究センターとの協賛）。

5日 CJS無料映画上映**：『鴛鴦歌合戦』マキノ雅弘監督（1939年）。

11日 ヌーン・レクチャー*：「Martial Ways, Whys & Whens: Military Science & Martial Art in Traditional Japan（中世の戦術と武の道）」カール・フライデー（ジョージア大学歴史学部教授、指導コーディネーター兼副学部長）。

12日 CJS無料映画上映**：後日発表。

18日 ヌーン・レクチャー*：「Playbills, Ephemera, and the Historical Imagination in Nineteenth-Century Japan（19世紀日本の芝居ビラ、短命、歴史的想像）」ジョナサン・ズウィッカー（ミシガン大学アジア言語文化学部助教授）。

19日 CJS無料映画上映**：『東京キッド』斎藤寅次郎監督（1950年）。

25日 ヌーン・レクチャー*：「Japanese Diplomacy – Japan U.S. Relations and East Asia Issues（日本外交―日米関係および東アジア情勢）」篠塚保（在デトロイト日本国総領事）。

26日 CJS無料映画上映**：『自殺サークル』園子温監督（2002年）。

11月

1日 ヌーン・レクチャー*：「Robo sapience jaoanicus: Humanoid Robots and the Poshuman Family（ロボ・サピエンス・ジャパニカス：人間型ロボットとポストヒューマン家庭）」ジェニファー・ロバートソン（ミシガン大学人類学部教授、『Colonialisms』編集人）。

2日 CJS無料映画上映**：『帰ってきたヨッパライ』大島渚監督（1968年）。

8日 ヌーン・レクチャー*：「The Emotional Expressions of the Japanese（日本語の感情表現）」デイヴィッド・マツモト（サンフランシスコ州立大学心理学部教授）。

9日 CJS無料映画上映**：後日発表。

15日 ヌーン・レクチャー*：「Photographic Immortality: General Nogi, Shizuko, and Their Iei（遺影の不死性：乃木将軍と静子を通して）」福岡真紀（ミシガン大学アジア言語文化学部助教授）。

16日 CJS無料映画上映**：『スワロウテイル』岩井俊二監督（1996年）。

12月

2008年1月

5日 CJS特別イベント：お餅つき。午後1～4時、社会福祉学部ビル（School of Social Work Building）インターナショナル・インスティテュート・ギャラリー（1080 South University, Ann Arbor）。

17日 ヌーン・レクチャー*：「Moneylenders, Merchants & Samurai; Rethinking the Social Impact of Cash in Medieval Japan（銭と中世日本：貨幣が前近代に本へどのような影響を及ぼしたか）」イーサン・セーガル（ミシガン州立大学歴史学部助教授）。

24日 ヌーン・レクチャー*：「Politics of Enshrinement: War Dead and War Criminals at the Yasukuni Shrine（合祀の政治：靖国神社の戦没者と戦犯）」竹中晶子（ミシガン大学美術史学部助教授兼研究学者）。

31日 ヌーン・レクチャー*：「Kissing Is a Symbol of Democracy!: US Popular Culture and the Creation of a Culture of Romance in Occupied Japan（キスは民主主義のシンボルだ！：占領下日本における米国大衆文化とロマンス文化の創造）」マーク・マクレランド（CJS 2007～2008年トヨタ招聘客員教授、オーストラリア国ウーロンゴン大学社会学講師）。

* 講演はすべて、別途通知のない限り、1636号室にて正午に開始されます。ヌーン・レクチャーは米国教育省から「タイトルIV」助成金を受けています。

** 映画上映はすべて、ローチ・ホール（611 Tappan Street, Ann Arbor）のアスクウィズ・オーディトリアムにて午後7時に開始されます。映画シリーズは、米国教育省から「タイトルIV」助成金を受けています。

最新情報につきましてはCJSのウェブサイト、http://www.iii.umich.edu/cjs/events/calendar.htmlをご覧ください。

総編集長より

第1ページより続く

を出版しています。同氏は英国シュロップシャーに在住しています。

近日中に出版予定の出版物には以下が含まれます。『*Mishima on Stage: The Black Lizard and Other Plays*（舞台の三島：黒蜥蜴およびその他の戯曲）』（ローレンス・コミンツ編、序文ドナルド・キーン）、『*The Bluestockings of Japan: New Woman Essays and Fiction from Seitô, 1911-16*（日本のブルー・ストッキング・レディーたち：「青鞜」の新女性の随筆と小説、1911～1916年）』（ジャン・バーズリー著）、『*Re thinking Japanese History*（日本の歴史をよみなおす）』（網野善彦著、アラン・S・クリスティー訳）、『*An Anthology of Japanese Nagauta Song Texts*（長唄歌詞選集）』（ウィリアム・マルム著）、『*Preachers, Poets, Women, and the Way: Izumi Shikibu and the Buddhist Literature of Medieval Japan*（僧侶、歌人、女性、そして道：和泉式部と中世日本仏教文学）』（R・ケラー・キンブロー）。

ブルース・ウィロビー
日本研究センター出版会総編集長

追悼

エドワード・サイデンスティッカー

このニュースレターが印刷所に送られる予定の日、CJSは、エドワード・サイデンスティッカー氏が東京で死去したことを知りました。サイデンスティッカー教授は、当センターの長年のよき友であり、1966～1977年にはミシガン大学の教授でもありました。『New Leaves』（CJS出版会、1993年）によると、同教授のミシガン大学での年月は、「不滅の『源氏物語』（1976年）、三島由紀夫の豊饒の海4部作シリーズの最後の作品である『天人五衰』（1974年）、そして川端康成の『眠れる美女』（1969年）、『山の音』（1970年）、『名人』（1973年）の3作品［の翻訳］を完成させた教師として最も生産的な時代であった。『山の音』は1970年度ナショナル・ブック・アワード翻訳賞を受賞した」とのことです。

CJSでは、「伝書」2008年冬季号にエドワード・サイデンスティッカー氏により相応しい賛辞を奉じる計画です。

DENSHO 伝書

ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
University of Michigan
1080 S. University, Suite 3640
Ann Arbor, MI 48109-1106
電話：(734) 764-6307
ファクシミリ：(734) 936-2948
Eメール：umcjs@umich.edu
ウェブサイト：http://www.ii.umich.edu/cjs/

所長：マーク・D・ウエスト
アドミニストレーター：深澤ゆり
プログラム・アソシエート：ジェーン・オザニッチ
アウトリーチ・コーディネーター：
グーヴェン・ウィットビーン
学務コーディネーター：高田あづみ
オフィス・アシスタント：サンドラ・モラスキー

ミシガン大学日本研究センター出版会
Center for Japanese Studies
Publications Program
University of Michigan
1007 East Huron
Ann Arbor, MI 48104-1690
電話：(734) 647-8885
ファクシミリ：(734) 647-8886
Eメール：cjspubs@umich.edu
ウェブサイト：http://www.ii.umich.edu/cjs/publications

出版会ディレクター：殿村ひとみ
総編集長：ブルース・ウィロビー
CJS執行委員会：ケビン・カー（冬学期）、北山忍、岡まゆみ、仁木賢司（職権上）、ジェニファー・ロバートソン、マーク・D・ウエスト（職権上）、ジョナサン・ズウィッカー（秋学期）

ミシガン大学理事：ジュリア・ドノバン・ダーロウ、ローレンス・B・ディーチ、オリビア・P・メイナード、レベッカ・マックゴーワン、アンドレア・フィッシャー・ニューマン、アンドリュー・C・リックナー、S・マーティン・テイラー、キャサリン・E・ホワイト、メアリー・スー・コールマン（職権上）

ミシガン大学は、平等機会／差別撤廃促進雇用者であり、1972年教育改革法法タイトルIXならびに1973年リハビリテーション法第504条を含む差別禁止および差別撤廃に関する連邦および州の準拠法をすべて遵守します。ミシガン大学は、雇用、教育プログラムおよび活動、ならびに入学において、人種、性別、肌の色、宗教、信条、国籍または出身国、年齢、婚姻状況、性的志向、心身障害、退役軍人地位に関わらず、あらゆる人物に関する差別禁止および機会平等の方針を確約します。侵害あるいは苦情につきましては、当大学の差別撤廃法担当ディレクターおよびタイトルIX／第504条担当コーディネーター（Director of Affirmative Action and Title IX/Section 504 Coordinator, 4005 Wolverine Tower, An Arbor, MI 48109-1281, (734) 763-0235, TDD (734) 647-1338）宛てにお願いします。ミシガン大学に関するその他の情報につきましては、(734) 764-1817にお電話ください。

伝書編集人：ジェーン・オザニッチ
伝書翻訳：川村まどか
伝書デザイン：ワグナー・デザイン
伝書制作：プリンテック